

水滸傳の後半部について

—その歴史性と文學性—

中 鉢 雅 量

水滸傳には「忠」「義」あるいは「忠義」という語がしばしば現われる。忠と義とは本来別々のものであり、李卓吾（『忠義水滸傳序』）が「忠於君、義于友」というように、忠は君に對する忠誠心、義は友に對する義俠心を意味する。水滸傳でもこの二字は使い分けられている。

「宋江」爲人仗義。疏財」（十八回）⁽¹⁾

「非是呼延灼不忠于國、實感兄長義氣過人」（五十八回）

「關勝看了一班頭領、義氣深重」（六十四回）

というふうに仲間内で使われ、忠は

「盡忠報國、死而後已」（七十一回）

「今奉詔命、敢不竭力盡忠、死而後已」（八十三回）

「寧可朝廷負我、我忠心不負朝廷」（百二十回）

というように朝廷や國家に對して用いられている。字面は違つても、忠と同じ概念を表わす「報國」「護國」「與國家出力」等の語も同じである。

義は招安を受ける八十回あたりまで頻繁に現われるが、それ以後は

少なくなる。忠及びこれに類似の語は、一〇八人が勢揃いする七十一回まではまれにしか出てこないが、それ以後はかなり多くなっている。一人一人違う經歷をたどりながらも、水滸英雄たちは互いに「義」によつて結び合わされ、梁山泊に引き寄せられてくるが、一旦勢揃いが完成すると、彼らには「忠」が強く意識されるようになり、そしてこれは以後の彼らの諸行動を導く指針になっていく。

「忠義」と熟した場合は、忠プラス義、水滸傳前半の義に更に後半の忠が重ね合わされたことを意味し、これは

「人稱忠義。宋公明、話不虛傳」（六十四回）

「你們若如此說時、須壞了忠義二字」（七十五回）

「我爲人一世、只主張忠義二字」（百二十回）

のように、七十一回あたりからの後半部の、水滸英雄の中心的スローガンとなった。六十回に、それまで聚義廳と呼んでいた山寨を忠義堂と改稱したとあるが、これは、それまでの義に以後は更に忠が加わることを暗示するものと思われる。この回は宋江が晁蓋に代わつて山寨の主になった時でもある。七十一回に、天から石碣が降り、その上に『替天行道』とともに『忠義双全』の文字がほられていたとある。この天書にちなんで彼らは堂上に一面の牌額をかけ、その上に『忠義

堂」と大書したという。この石碣上の『忠義双全』は、義への忠の重ね合わせが、この時から本格的になることを暗示する。それはちやうど、第一回で洪太尉が妖魔を釋き放してしまふことが、その後に来る一〇八人の活躍をそれとなく示しているのと同じである。また七十一回と言えば、一〇八人が勢揃いするところでもある。

かくして七十一回以後の水滸英雄の行動は、忠（忠君意識）を軸にして展開されていく。ただしこの忠は義の上に成り立っているものであり、だからこれと忠義とはほぼ同じ意味になる。私はしばらく水滸傳の忠君意識に焦點を絞ってその構成を考えてみたいが、水滸傳でも使い分けられているし、論旨をより明晰ならしめるため、忠だけを問題にしたい。しかし忠と言ひ、忠義と言ひもほぼ同じ意味である。

この忠の最初の具體化が招安である。彼らは梁山泊によって朝廷と對立することは犯罪行為であり、一日も早く招安を受け、國家のために働きたいと考える。更にこの忠君↓招安の線の延長上にあるのが征遼であり、征方臘である。⁽²⁾前者の時には「與國家出力、建功立業、以爲忠臣」(八十三回)と決意を語り、後者の際にも「前去征剿、盡忠報國」(百十回)と抱負を述べている。特に征遼の場合、それは彼らの忠君意識の具體化以上のもではなく、彼らは遼國に對する敵がい心はほとんど持っていない。

このように彼らの招安―征遼―征方臘の諸行為は、その忠君意識の具體化ということで過不足なく説明できる。

今まで忠君は宋江だけが語るもの、宋江あつての忠君、忠君あつての宋江のように多くの場合論じられてきたが、私はこうした見方には賛成できない。確かに直截にこれを口にするのは大體において宋江で

ある。しかし口こそ出さないが、結局は宋江と同じ『忠君の士』は他にもいる。例えば戴宗もその一人である。四十一回で李逵が、「放着我們有許多軍馬、便造反、怕怎地、晁蓋哥々便做了大皇帝、宋江哥々便做了小皇帝云云」と言ったので、彼は、「再如此多言挿口、先割了你這顆頭來爲令、以警後人。」と叱りうけているが、これが晁蓋や宋江の手前を憚つての單なる外交辭令でないことは、

「只等朝廷招安了、早晚都做個官人」(四十四回)
と彼が招安を待望していることから判明する。また、仲間に入るようにとの宋江の勧誘を

「生爲大宋人、死爲大宋鬼、寧死實難聽從」(六十二回)
と峻拒した盧俊義にしてもそうだし、

「我等在梁山泊時、已是大罪之人、幸然不死。感得天子赦罪招安、北討南征、建立功勳」(百二十回)
という花榮もまた然りである。つまり私が一〇八人を二種類に分けた、その一方の知識人グループに屬する者は、おそらくは皆『忠君の士』である。その支持者が少なくとも半数程はいなければ、いかに宋江が忠君を力説したところで、それによって梁山泊の大部隊を動かせるわけがない。

にもかかわらず専ら宋江がこの種の言葉を口にするのは、よくも悪くも梁山泊の運命を決定づける重要な作用をもったこの忠君意識を、宋江に代表して負わせているからだと思われる。七十一回に『忠義双全』の天書が降つたとあるのは、忠が宋江個人に附與されたのではなく、梁山泊の英雄たち全體に附與されたものであることを物語っている。

實在した宋江は、忠義などを口にするしかつめらしい人物ではな

く、むしろ「勇悍狂俠」(元、陳泰「所安遺集補遺」江南曲序)という感じだったようである。「劇賊宋江」(宋、汪應辰「文定集」卷二三、顯謨閣學士王公墓誌銘)とか、「義勇相展るなかれ」(「宋江三十六人贊」)とあることから推察するに、あらつぽく向こう見ずの男であつたようだ。

多くの元曲が、例えば「風高敢放連天火、月黑提刀去殺人」(「黒旋風双獻功」)というふうに、勇悍狂俠というにふさわしい宋江を描いている。それがいつの間にか忠君の士宋江に變えられていったのは、水滸傳が成立する過渡で、水滸起義の性格を代表して擔わされるようになったためだと思われる。

二

招安―征遼―征方臘というコースをたどつた水滸英雄の側の必然性は、彼らの有していた忠君思想によつて説明できるが、他方彼らの忠君思想が支配者たちに利用されて、彼らは招安―征遼―征方臘へと追いやられたというもう一つの面も見逃がすことができない。つまりこのコースを宋江等は、その抱く忠君思想に基づいて自ら選び取つたのだが、もう一方では、それは支配者たちの大いに歓迎する所でもあつたということである。第一回目の招安の前、御史大夫崔靖なる人物は次のように奏上した、

「即目遼兵犯境、各處軍馬遮掩不及、若要起兵征伐、深爲不便。…若降一封丹詔、光祿寺頒給御酒珍羞、差一員大臣、直到梁山泊、好言撫諭、招安來降、假此以敵遼兵、公私兩便」(七十四回)

これに徽宗も「卿言甚當、正合朕意」と答えている。また支配者たちは、一旦彼らを招安することを決意すると、彼らに對する贊辭を惜し

水滸傳の後半部について

げもなく口にする。

「梁山泊以忠義爲主、只待朝廷招安、太尉可着些甜言美語、加意撫恤。」(七十五回)

「寡人(徽宗)聞宋江這夥、不侵州府、不掠良民、只待招安、與國家出力。」(八十二回)

「這一班人、非在禮物輕重、要圖忠義報國、揚名後代。…此一夥義士歸降之後、必與朝廷建功立業。」(同)

ひとまず腰を低くして梁山泊の意に阿り、然る後思いのままに、という段取りである。

招安を受けた後の宋江等の取り扱いについては次のような三つの提案がなされた。一つは、

「陛下可將宋江等所部軍馬、原是京師有被陷之將、仍還本處、外路軍兵、各歸原所。其餘人衆、分作五路、山東、河北、分調開去。此爲上策。」(八十二回)

というもので、「端的要如此、我們只得再回梁山泊去」と衆頭領の反撃に會い、慌てて引っこめて次に出してきたのが、

「這厮們雖降、其心不改、終貽大患。以臣愚意、不若陛下傳旨、賺入京城、將此一百八人、盡數剿除、然後分散他的軍馬、以絕國家之患。」(同)

という童貫の提案である。そしてこの二つを打消す形で三つ目の太尉宿元景の提案がなされる。

「以臣愚見、正好差宋江等全夥良將、部領所屬軍將人馬、直抵本境、收伏遼賊、令此輩好漢建功、進用于國、實有便益。」(八十三回)つまり招安を受けた後の彼らには、三つの處遇が待ち構えていた。

「分遣調開」(解散)か「盡數剿除」(皆殺し)か「大遼遠征」かであ

る。そして前二者の施行を許さなかったのは、宿太尉が「二百八人、恩同手足、意若同胞、他們決不肯便拆散分開、雖死不舎相離」(八十三回)、また「如何今又要害他衆人性命、此輩好漢、智勇非同小可。倘或城中顛變起來、將何解救」(同)と言っているように、百八人の強い團結と、童貫を二敗させ、高俅を三敗させた強大な軍事力である。

そこで彼らは、先ず大遼遠征という形で利用されることになった。これは宿太尉の發案で(彼個人としては宋江らを利用する意圖はなかったであろう)、實現したことはあるが、先の御史大夫崔靖の奏上をも合わせ考えると、宋江等が初めから忠君意識をもっているのと並行して、統治者の側にもそれを利用しようという政治的意圖があつたと考えるのが妥當である。

ただ利用しようとしただけであるから、宋江等が大きな功績を立てても、それを全く無視するか、最小限度に報いる態度を取つた。百八人が大遼遠征から凱旋した時は、「那蔡京、童貫等那裏去議甚麼封爵、只顧延挨」(九十回)と、結局は何の論功行賞もしないで次の征戦へと追いやっている。方臘征討からの歸還後でも、最後まで残つた二十七人には一應それぞれ官職が授けられたが、阮小七は官を奪われ、柴進はそれを見て自ら返上し、次いで盧俊義と宋江は毒殺され、李逵、吳用、花榮も共に死ぬ。かくして統治者たちは、二つの戦役で宋江等を利用しただけして、最後に彼らの本心である「分遣調開」及び「盡數剿除」をほぼ完全に實現したのである。

一方宋江等は利用されているとはさらさら思わず、本氣で「以報朝廷赦罪之思」と考へて奮戦した。この邊に關しては、例えば大遼遠征の場合だと、皮肉にも敵國である遼の歐陽侍郎の

「今將軍統十萬精兵、赤心歸順、止得先鋒之職、又無昇受品爵、衆弟兄勦勞報國、俱各自身之士、遂命引兵直抵沙漠、受此勞苦、與國建功、朝廷又無恩賜。」(八十五回)

という指摘こそ、第三者としての客觀的な見方であり、的を射ていると言ふべきである。

尤も宋江等も統治階級のこのような冷遇に満足してはいたわけではない。先の歐陽侍郎の働きかけがあつた後で、吳用は「端的是有理」と考へこみ

「設使日後繼有成功、必無昇賞。……棄宋從遼、豈不爲勝。」(八十五回)

と意外な心中を告白しており、また宋江自身も、遼をもう一步の所まで追いつめながら、彼らの行き方を無視して一方的に休戦班師を決定した上層部に對して、

「非是宋某怨望朝廷、功勳至此、又成虛度。」(八十九回)

と不満をもらしている。しかしこうした不満も彼らの忠義心を冷却させることはなかつた。更に、結局は蔡京らの毒手にかかつたことがはつきりした段階でも、宋江自身は

「我爲人一世、只主張忠義二字、不肯半點欺心。今日朝廷賜死無辜、寧可朝廷負我、我忠心不負朝廷。」(百二十回)

と、朝廷に利用されたとは露ほども思わず、忠義を全うしたとして死んでいく。統治者の側ではフルに利用して擧句の果てに所期の意圖を實現したことなのに、宋江等は自分たちのしたことは光榮あるものだししか感じなかつたところに大きな悲劇があつた。⁽⁶⁾

水滸英雄たちの招安—征遼—征方臘の行動は、このように彼らの忠

君思想が支配者たちにうまく利用されることによって引き起こされた。つまり招安以後の彼らの行動は、彼らのもっている忠君思想によって推進されたという、いわば内的要因と、他方その忠君思想が支配者たちに利用されて彼らの思うがままに驅役されたのだという外的要因とが相俟って成立したのである。この二つの要因を考え合わせることによって初めてこの一連の行動の由って來たる所以を全面的に説明できるし、そしてそれは水滸起義の性格を科學的に、歴史的に認識する方途でもあらう。

三

水滸起義の成り行きにかくも決定的な作用を及ぼしている忠君思想は、では歴史の上に實際に存在した宋江起義から、その隊伍に既に附随していたものだろうか。それとも水滸故事が成長してくる過程でその中に取りこまれていったものなのだろうか。

實際の宋江起義については、「宋史」その他に若干の記述があるだけで、彼らが忠君を標榜したか否かは知る由もない。しかしながら宋江のと似た性格の起義が、ほぼ同じ時代にいくつもあり、それらの中のあるものは確かに忠君を掲げている。以下に南宋の徐夢莘撰「三朝北盟會編」(以下「會編」と略す)から二、三の場合を拾い出してみよう。(一)内に「會編」の卷數を示す。

1 張用の場合

「張用は相州湯陰縣の弓手であったが、民衆の自警團が組織されるのに乗じて衆を集め、曹成、李宏、馬友と義兄弟の契りを結び、數十萬の衆を六軍に分けて統率していた。そのうちに王善も數十萬の衆を率いて彼に合流した。張用と王善とは宗澤の招安を受け、復た反した

が、更に京城留守杜充の招安を受け、京城に駐屯した。杜充は、張用の軍が最も強大で、結局は統制できなくなることを恐れ、京城の西に駐屯していた岳飛、桑仲、馬皋、李寶の諸軍に命じて張用を討たせた。時に建炎三年正月である。張用はこの動きを事前に察知して拒ぎ戦い、王善も來援して官兵は大敗し、官軍の蹇關索と呼ばれた李寶は捕えられた(一一〇)。

二人は京城を去って陳州に行った。杜充は馬皋を遣わして彼らを追撃させたが、大敗し、死體が蔡河を填めた(同)。その後張用は王善と別れ(王善はこの後、金に投降)、西京に駐屯した。數州にわたって兵馬が連ねられ、その衆が多い故に張莽蕩と呼ばれ、食糧を掠奪し、至る所空になった(一二三)。馬友は數萬の兵を譲り受けて張用の下から去る(一三〇)。

その頃間勅は、濠州で張用に會い、朝廷に歸順するよう彼を説得し、馬皋(これより前郭仲荀に殺された)の妻一丈青を張用に妻せた。張用は彼女を中軍統領としたが、彼女の馬前には「關西貞烈女、護國馬夫人」ののぼりが掲げられた(一三八)。

その後張用は舒城縣に姿を現わし、軍を屯したが、近くは金人が往來し、野に掠めるものなく、食物に全く窮し、かめるものは何でも食べ、疲弊の色が濃厚であった(一三九)。金人に迫られた避難民を彼は麾下に引き寄せ、山東や湖北の土庶で失業した者が多く歸した(一四〇)。建炎四年六月、彼は德安府に赴いたが、部下が内輪もめを起こして統領官馬老爹が殺され、これ以上兵を統率して行軍を續ける自信のなくなった彼は、「諸人各々辛苦に耐えよ」と言い渡して隊を解散し、彼自身は淮陽へ行った。一、二千の部下がやはり従っていた(一四〇)。

やがて彼は鄂州路安撫使李允文の招安を受ける。彼の妻一丈青は、夫がいなくなったために亂れた中軍をよく掌握し立て直し、二萬の衆を引率して鄂州に赴き、再び夫と合流することができた(一四一)。紹興元年正月、李允文は策略を用いて張用の軍を皆殺しにしようとしたが、事前に密かに彼に知らせてくれた者があり、豫め備えをなしたために大事に至らなかった(一四四)。張用は依然として鄂州の城中にあったが、張用のかつての盟友の一人馬友は、都統王成に鄂州を攻めさせた。彼は城上より誰何し、王成だと聞くと、その不忠を責め、いしゆみでこれを射、退散させた(一四七)。七月、張用は威寧縣から江西に赴いたが、途中岳飛の招安を受ける(同)。張俊は、張用が率いていた五萬の軍から、強壯な者を選び出して留め、老弱者は追いつた(同)以上である。張用がなぜ初め反亂を起したのかは明らかにされていないが、この飢えた數十萬の武裝集團は、ただ食糧を手に入れるために各地を轉戦した。侵略者の金人と一戦を交えようと思えばいくらでもそのチャンスはあったが、飢えを充たすという目先の、しかし極めて切實な欲求に驅りたてられていた彼らには、抗金などの甚だ迂遠に思える觀念を追求する餘裕はなかった模様である。

彼らは何度か招安を受け、そして受けた後の處遇に不満で何度か離反した。ある場合には受けた後で皆殺しにされなかったが、その都度自らの強大な軍事力でそれを食い止めた。とにかくここで注意すべきは、李允文の招安を受けた張用が、かつて自分の部下だった王成を不忠となり、弓で射てさえることである。つまり張用の場合でも招安と忠君とは固く結びついている。張用が初めから忠君思想の信奉者であったか、それとも張用を招安して利用しようとする支配者たちがその都度張用の、平素は眠っている忠君意識を激發させたのかそれは

不明だが、いづれにしても忠君意識をもとにして招安に就いていったことは間違いない。更に彼は招安を受けた後、その忠君意識の上に立つて、招安を受ける前までは自分も仲間であった者に弓を引いているのである。また招安を受けて岳飛や張俊の麾下に入ったのであるから、それ以後は、「會編」に記述はないが、抗金や、盜賊、討伐に従ったのであろう。

水滸傳描く所の宋江起義と、張用の場合とは、一體何を求めての亂であったのかその追求した目標については必ずしも同じくはないが、忠君→招安→侵略した異民族や國內の反亂者討伐という經路をたどったという點ではほぼ同じである。また水滸傳の一丈青扈三娘は、この張用の妻一丈青を踏まえて形象された形跡があることも、兩者の類似性を探る上では見逃がせない點である。更に一例あげる。

2 邵青の場合

「邵青は濟南府五丈河の船頭であったが、盜みの常習犯でもあり、そのうちに舟船を集めて楚州泗州の間に横行するようになった(一二七)。丁立なる者が彼の相棒であったが、そのうちに洪澤の羅成をも併合した。彼らは建炎三年八月に招安を受け、邵青は沿江措置司水軍統制となった(一三三)。

十一月、金人はいいに揚子江を渡る。南岸の宋將は迎え撃つどころか先を争って逃走したが、ひとり水軍統制邵青だけは、一舟に一八人を載せ、金人の前に立ちふさがった。船頭の張青という者が十七本も

の矢にあたったので、已むなく竹篠港に退いた(一三四)。

京西路安撫司參議官の魏曦という者は、侗儻の士であり、建康にいたが、邵青は彼を仲間に取り入れて軍師とし、衆を率いて蕪湖へと向かった(一三五)。蕪湖縣を占據していた李成の徒の周虎なる者を打ち

敗り、そこに駐留した(同)。張俊が李成を討った時従軍したが、食糧がないので蕪湖に戻り、更に、買賈をさせに部下を太平州に遣わした。邵青を喜ばない知州の郭倬は、城に入れなかつたので、邵青は怒つて仲間の單德忠、孫立、魏曠、閻應などと城を攻略したが、城を守る側も、多くの犠牲者を出しながら、知州郭倬の勇敢さと智略によつて持ちこたえ、最後に邵青は水攻めに遭つて敗走する(一四七)。

たまたま鎮江府にいた劉光世が邵青を招安し、彼もそれを受けて鎮江へ向かうが、そこを通過してしまい、海船を手當り次第に掠奪しながら海に入り、崇明鎮に駐屯した。朝廷は王徳を派遣して彼を討たせたが、逆にさんざんに打ち負かされ、窮した王徳は「你是好漢、盡歸朝廷乎」と、招安という手を考え出し、邵青も黃榜(勅命を書いた札)を降すことを條件にそれを呑んだ。しかしその文面は「水賊邵青、その勢困厄し、廣く殺すに忍びず、榜を降し招降するを乞う」という居丈高なもので、邵青はそれを拒絶してしまふ。けれども副頭領の單德忠は、招安反對派の閻在を殺して邵青に招安受諾を迫り、かつ邵青の妻もそうするよう勧めたので、彼もついに承知する(一四九)。彼は再び樞密院水軍統制となる(同)。

これより先、杜充が建康を守っていた時、秉義郎趙祥なる者がおり、水門の門番をしていて、ある時邵青に捕まった。邵青が招安を受けてから趙祥は逃げ出して内侍綱のところを身を寄せていたが、綱は小説が上手で、上は彼の話を喜び、そこで綱は最近のニュースを種に小説を編もうと考え、趙祥に、邵青の旗上げ以後の蹤跡、ならびにその徒黨の忠詐及び強弱の將について詳しく語らせた。綱はそれを編集し、上にご進講申しあげた。そこで上は邵青の用うべきを知り、單德忠の忠義をお喜びになった(同)。

水滸傳の後半部について

以上である。邵青が初めに「聚衆」した動機は、やはり明らかでないが、彼の場合も、張用のと同じく多くは「糧に就く」ことを目あての行軍だったようだ。そしてこの隊伍にもやはり單德忠のような「忠義の士」がいたという。いや彼一人だけではない。「單德忠は將士皆朝廷に歸するの意あるを知り、且つ謂えらく、閻在を殺さずんば、必ず招安を受くるを肯んぜずと。」(「會編」卷一四九)とあるのより推察するに、半數以上がそうであつたようである。尤もこの場合でも、こうした忠義心の表明は、朝廷から派遣されてきた王徳が彼らに招安を受けるよう呼びかけた後になされたという點は注意しておく必要がある。

彼らは「朝廷に負き違ふべからず、宜しく兵を納めて以て罪を贖ふべし。」(卷一四九)とあるように、贖罪意識で招安に就いており、この邊の意識構造は水滸傳とよく似ている。そして、この最後の招安の後で邵青らは國家のためにどんな手柄を立てたかの記述はないが、建炎三年八月に江東制置司の招安を受けた後では、揚子江を渡ろうとする金の大軍の前に唯一人立ちふさがるといふ不敵な抵抗を試みている。彼らの場合でもやはり、忠君―招安―抗金や盜賊鎮壓に利用される、という圖式が成り立つ。

なお邵青の部下孫立、張青は、それぞれ水滸傳の病尉遲孫立、沒羽箭張清(水滸傳のあるテキストでは張青に作る)と何らかの關連があるのかもしれない。

張用でも、邵青でも、彼らの勢力は相當なものである。官軍は彼らを掃蕩しようとして時に大敗を喫し、時に手こずり、とにかく成功したためしがない。そこで朝廷は招安という手段に思い當る。それは戦わずして彼らを體制側に組み入れる有効な手だてである。と同時に、

うまく行けば彼らの武力を、當時南侵を續けていた金軍や、各地に際限なく蜂起する反亂者との戦鬪に役立てることが出来る。

朝廷側にすればそれこそ一舉兩得であった。かくてこの時代には招安が盛んに行なわれた。

しかし招安が成功するためには、その対象となる「賊」の隊伍に忠君の精神が何程か存在する必要があった。彼らが初めから忠君を標榜してくれていればそれでいいし、そうでない場合には説得活動によって彼らの中の眠れる忠君意識を目覚めさすという方法を用い、とにかく彼らの忠君意識に乗ずることによってのみ、招安の成立は可能であった。

但し彼らの忠君は、あまり確固不動のものではなかった。一旦招安を受けながらまた離反したりするところからそれが知れる。そこで張用にしろ、邵青にしろ、招安を受けてからは必ず誰か官軍の大物の麾下に入っている。反服常ならない彼らを朝廷の迷惑通りに動かそうとすれば、彼らの兵力に數倍する官軍が常時彼らのまわりをとり圍んでいなければならないと見える。この點でも、一應童貫の指揮下に入つて方臘を討つた水滸傳の宋江の場合とよく似ている。張用、邵青の他、戚方などもほぼ同じ経過をたどつてゐる。

張用や邵青の忠君と、所謂忠義軍のそれとは、同じ忠君でもニエアンスがかなり違ふ。忠義軍の場合には、例えは

「(靖康元年)十一月、馬擴奔走して西山の和尚洞山寨に至る。時に兩河の義兵各々寨柵に據り、屯聚して自ら保つ。衆請うて馬を推して首と爲す。……馬即ち前み立ち、衆を率いて香案を具え、南嚮して拜して曰く、ここに遙かに闕廷を望み、君命を稟けて事を立て、しばらく國の威靈を假り、以て克復を圖る。」〔會編〕卷九〇〕

とあるように、忠は彼らの中心的なスローガンであり、その旗印のもとに衆を聚め、一貫して金に對する抵抗戦を展開した。同じく「會編」卷一一三に

「(王)彦、太行山に入りて衆を聚む。皆面に赤心報國誓殺金賊の八字を刺し、八字軍と號し、兩河響應す。」

とある王彦の場合でもその點は全く同じである。王彦の兵勢は甚だ盛んで、金人はために南侵をためらう程であったが、建炎二年五月に京師留守宗澤のもとに投じ、以後も華々しい活躍を演じている。

張用、邵青などと馬擴、王彦らの忠義軍との違いは、次の「會編」卷一四二の一條が最もよく表わしてゐるであらう。建炎四年八月、王彦は人を遣わして王關を招降した、

「(王)彦、人を遣わして逆順を以て關を諭さしむ。關に使用するに、忠義もて朝廷に歸すと叛賊に附するとは、榮辱利害相去ること甚だ遠きを以てす。關大いに悟り、降るを請う。」

つまり一方は忠義の旗印のもとに「賊」を招降しようとし、一方は投降した「賊」である(この王關の亂と、張用、邵青のそれとは必ずしも同性質でないかもしれないが、招降されたという點では同じである)。

そして彼らがそれぞれに掲げた忠は、忠義軍のは、言うなれば「前面に大書された」忠であり、それに對して張用、邵青のは「後面に小書された」忠である。

更に忠義軍は張政娘氏が、
「ただ民族的仇恨があるだけで、階級的自覺はなく、彼らは宋朝の皇帝と官吏とを怨まないばかりか、かえつて毎日宋朝の使臣と詔書とを待ち望む。」

と指摘するように、現體制に對する反逆者では決してない。従つて朝廷は黃榜を降して彼らを招安したりする必要は全くなかつた。しかし張用や邵青は現體制に對する反逆者であり、ここでいう階級的自覺（反抗意識というような意味であらう）をもち、従つて朝廷は彼らを招安する必要があつた。これが兩者の第二の相異點である。水滸傳描くところの宋江起義が忠義軍と似た性格をもっているか、それとも張用や邵青の起義との共通性をより多く示すかということになつたら、言うまでもなく後者である。水滸傳でも前に見た通り、忠君思想は重要な働きをしているが、しかし一〇八人は忠義の旗の下に結集して専ら侵略者たる異民族に抵抗したわけではない。そして何よりも彼らは現體制に反旗を翻した集團であり、さればこそ招安される必要があつたのである。

以上に論じてきたことから、水滸傳描く所の宋江起義は、南宋の初めにあつた張用や邵青の起義とよく似たものであることがほぼ明らかになつたと思う。けれども實際の宋江起義がどんなものであつたかはまた別に論じられて然るべきであり、今までの所論から類推できるといふものではない。

四

實際にあつた宋江起義については、「宋史」その他に僅かの記載があるだけだが、それでもおおよその輪郭は知れる。

宋江等は各地に横行し、數萬の官軍も取り押えることができなかつた。しかし張叔夜は計略を用いてその隊伍を撃破し、彼らを招降した。

この後、今までは

水滸傳の後半部について

童貫の指揮下に入つて方臘を討つた。

と考えられてきたが、最近宮崎市定氏は「北宋末に宋江は二人おり、張叔夜に投降した宋江と方臘を討つた宋江は別人である」との説を樹てた。また中國の學者でも、例えば張政娘氏も、宋江が方臘を討つた旨を記す資料はいずれも信を置けないという理由で、「宋江は方臘を征さず」と斷じている（宋江考）。いずれにしても、張叔夜に投降した宋江は方臘を征討しなかつたことになる。

しかしながら、實際の宋江起義が起こつた後に、それをもとにした水滸傳話が生成・發展する中で、「その後宋江は方臘を征した」という筋、つまり征方臘の段が加えられたであらうことは十分に想像される。それは一つには「宋史」卷三五一に見える侯蒙の上書に、

「今青溪に盜起る。江を赦し、方臘を討ちて以て自ら贖わしむるに若かず。」

とあるからである。もう一つは、「三」に掲げた張用や邵青のように、招降された者が抗金闘争や國內の賊軍討伐に投入されることは、北宋末には一般的だつたからである。更に、宮崎氏の言うように、方臘を征伐した同姓同名の宋江がいたとすれば、なおさらそういう筋になり易かつたであらう。そして張叔夜に投降した宋江が方臘を討つたといふ説話が成立したのは何時頃かと言え、宮崎氏が前掲論文で、

「この書（皇宋十朝綱要）はどうやら、宋江の投降の月日を、方臘討伐に間に合わせようとして、故意に早めようとした意圖があつたと見られる。著書の李堅は光宗（一一八九—一一九四在位）の時の進士というから、その活動時期は大凡そ南宋の中期に當る。即ちこの頃から、兩者の混同が始まりかけていたと見てよいであらう。」と書いているのを参照すると、遅くとも南宋中期にはそうなつていた

のではないか。歴史家すら混同するくらいだから、説話人はそれより一步も二歩も先に混同していたであらう。

さて水滸傳の宋江が盛んに口にする忠は、初めからあったものなのかどうだろうか。實際の宋江起義の隊伍に忠君が唱えられたか否かは無論解らないが、遅くとも征方臘の段ができ上がる際には導入されていたのではないか。「三」で見たように、招安—賊軍討伐のコースをたどる隊伍には必ずといってよい程何程かの忠君意識が存在するからである。この頃には既に忠君意識が存在したであらうと推定できる根據がもう一つある。それは南宋の龔聖輿の「宋江三十六人贊」に、やはり忠君意識らしきものが表現されていることである。「義國安民」(吳學究)、「國功可成」(孫立)、「願隨忠魂」(張順)というふうに散見する。

尤も「三十六人贊」に表現される忠君意識は、私の言うように招安—征方臘を成り立たせるために必要不可欠のものとして導入されたのではなく、南宋の忠義軍あたりから借用するなりして手輕に採り入れられていったのだと考えられなくもないので、この點をはっきりさせよう。「宣和遺事」にも、「廣行忠義、殄滅奸邪」、「助行忠義、衛護國家」と忠義をうたうが、一方

「各人統率強人、略州劫縣、放火殺人、……劫掠子女玉帛、擄掠甚衆。」

という一條があり、こうした荒々しさと忠義とが共存するのは、忠義軍では考えられないことで、『勇悍狂俠』の宋江、あるいは張用や邵青にして始めて可能である。「三十六人贊」の忠君思想もおそらくこの荒々しさ(『勇』と表現されているのがこれに當るのではないか)と矛盾しない忠君思想であるに違いない。

張政娘氏は同じ「宋江考」で

「私たちが忠義軍の首領が宋元小説家によって宋江に轉成されたと言うのは、明確な證據はないが、小説の中の宋江の投降性格と『忠義』のスローガンは忠義軍から偷み出したものであることは毫も問題がない。」

と論じているが、宋江はかなり早い時期の水滸説話から忠義心を所有していたので、どこからも偷み出す必要はなかったと私は言いたい。なお張政娘氏の所謂階級的自覺は、どう見ても水滸傳の宋江にもあるとすべきだが、それのない忠義軍の首領と同一視するのはどんなものだろう。

次に、楊志は、宋江と同様歴史に實在した人物である。「會編」卷六に、

宣和四年六月、大遼に遠征した童貫は河間府へ進駐したが、种師道、王禀、楊惟忠、趙明等といっしよに楊志も從軍し、劉延慶の指揮下に入って選鋒軍を將っていた。

旨の記録がある。この楊志が「宋史」のいう「宋江三十六人」の一人であったという記録は史書には全くない。しかしながら水滸説話がふくらみを増してくる過程で、この楊志は三十六人の一人ということになっていく。本来無關係な楊志と宋江が、説話の中で結びつく原因が二つある。一つは、「會編」卷四七に、「招安巨寇楊志」とあるように、楊志も招安された隊伍の一人であることである。もう一つは、方臘征討に参加したのとほぼ同じメンバーが、前記宣和四年の征遼戦に加わっており、餘嘉錫氏のように(「宋江三十六人考實」)、「楊」志將いる所は、即ち宋江の兵なり。」と斷定することはできないが、楊志が宋江の部下として征方臘戦に従事したであらうという推測は容易に生ま

れる餘地があったということである。

「宋江三十六人贊」には、青面獸楊志の名も既に見えているが、水滸説話の中で楊志が三十六人の一人とされた時から、宋江等が大遼に遠征する一段が更に増し加えられる可能性が出てきたと言える。なぜなら招安された隊伍が侵略者との戦闘に投入されることは北宋末に始終見られた光景であり、また現に楊志は征遼戦に参加した一人であるからである。かくして水滸傳の征遼の段も南宋末くらいにはできていたと推測することも可能であるが、確證はない。

宋江等が方臘を討つたり、大遼を征したりしたことは、歴史事實としてはなかったが、招降された隊伍がその抱く忠君意識に基づいて反亂者の鎮壓や侵略者の討伐に参加することはよくあったという北宋末の政治的状況と、それらしき事柄（侯蒙が宋江を方臘征討に派遣するよう上書したこと、楊志が大遼に遠征していること）は實際にあったことから判断するに、これら（征方臘、征遼）は極めてあり、そう、なことだった。實際にはなかったが、假に實際にそういうことが起こっていったとしても、誰もがそうなることの必然性を疑わないような事柄だった。私は實は水滸傳はその後半部でも「歴史の眞實」を表わしていると言いたいのだが、それは既に水滸説話の段階で獲得されていたものである。

ここで「三」と「四」で述べたことを簡単にまとめておく。遅くとも南宋の中期頃には招安―征方臘の筋をもった水滸説話ができ上り、またその筋を成り立たせるための忠君思想も説話の中に導入されていた。そのうちに征遼の段も増し加えられる。このようにして説話の中に表現された宋江の起義は、同じく忠君を標榜しても忠義軍とは性格が異なり、張用や邵青の起義と似たものである。そういう意味で説話

の中の宋江起義は、そのまま歴史事實ではないが、當時では極めて起り得た事件であった。既に説話の中で形成されたこの「歴史の眞實」を水滸傳はそっくり受け継いだ。水滸傳の作者は、作品の大筋を考へ出すのに工夫を費す必要はなかったと言える。

なお、解放後の中國では、水滸傳の宋江起義を農民一揆（中國流に言えば農民起義）と見る説が専らであるが、私はこれにも敢えて異を唱えたい。その一半の理由を、注3に掲げた拙稿で前に述べたが、こ

こでも若干補足しておきたい。方臘や楊公の一揆は、宋代の農民一揆の代表的なものだが、彼らは忠君をほとんど口にしなないし、それに束縛されることもない。方臘にも楊公にも朝廷の方からは招安の手を差し延べているが、二人ともそれを拒絶した。また

「臘自ら聖公と號し、永樂と改元し、偏裨將を置き云云」（宋、方勻「青溪寇軌」）

とあり、「鼎寇楊公、衆益々盛んにして、大聖天王と僭號し、旗幟もまたこの字を書し、且つ用うるに紀年を以てす。」（宋、李心傳「建炎以來繫年要錄」紹興三年四月の段）

とあるように、二人とも宋朝の支配の及ばない独自の權力を樹立した。

方臘や楊公は貪官汚吏に對する敵意をむき出しにはしているが、朝廷そのものは決して否定せず、このいわば反抗の質では宋江等と同じである。しかし方臘や楊公は、宋江等と違って、招安を拒否したり、別の權力を樹立したりしたのは、彼らには忠君意識が稀薄だったとい

うか、少なくともそれに拘束されていないことの結果である。

忠君思想のもとに招安に就いて行く宋江を、どうしてこれらと同じ農民一揆であると言えようか。なお關覆權氏は「論兩宋農民戰爭」(『歴史研究』二期、一九六二年四月)で、

「ただし當時の歴史的條件の下で、貧困農民にはとにかく小作する田があり、それがまあ生活を維持する一筋の希望であったし、農民が他方へ流れ去るのを防いだ。このため小作關係の全般的發展は一定程度農民を安集させる作用を起し、農民の流亡を少なくし、それで農民起義の鬭争範圍の擴大にも影響を與えた(擴大を阻んだ)。」と論じていることは、方臘や楊么には全くあてはまるけれども、歴史上の宋江にも水滸傳の宋江にも明らかに適合しないのである。

五

私は「一」「二」の項で、水滸傳の招安―征遼―征方臘の諸行動は、水滸英雄の抱く忠君思想によって導き出され、他方その忠君思想が支配者利用されるといふ二つの側面の中からみ合いの中で成立したと論じた。このような性格の起義は、そのまま歴史事實ではないが南宋初にあった張用や邵青の起義とよく似ており、そういう意味で水滸傳は「歴史の事實」を表わしてはいないけれども「歴史の眞實」を表わすものである。

しかしながら過去にあったこと(歴史の事實)、あるいはあり得たこと(歴史の眞實)が書かれているというそれだけの理由でその作品は優れているなどとは言えない。個々の話柄が積み重ねられるうちに、そういう筋の運びが極めて自然だと讀者が納得する時、つまり小説全體にリアリスティックな精神が生きていて始めて歴史の事實なり

歴史の眞實なりは人を感動させる『眞實』となってくる。

解放後の中國では、水滸傳を現實主義(リアリズム)の作品とする見方が一般的である。この場合の現實主義とは、前の場面が後の場面に移行するその必然性を平凡な日常生活に時として起こり得る事件を有機的に書き連ねることによって示すというような方法を言う。私もこの見方に賛成である。これについては、中國の水滸研究者の優れた分析がいくつもあり、それを二、三紹介して私の所論に代えたい。

李希凡氏は林沖落草の段を要旨次のように分析する。

「豹子頭林沖は、東京八十萬禁軍教頭で、社會的地位も低くなく、仲むつまじい平和な家庭があったが、林沖の『時運不濟』運が悪く、ある偶然の機會に太尉高俅の子高衙内が見染め、ここにおいてこの仲むつまじい平和な家庭に急に悲惨な陰雲がたれこめ出し、その後一連の陰謀が林沖の頭の上にふりそそいだ。この一段の複雑な經過の中で、分に安んじ己れを守る林沖は、終始一貫氣を忍び聲を呑み、封建王朝に背叛しようなどと思わず、統治者の迫害が一步一步身に迫ってくるのに任せ、ひたすら遠慮しつつ妥協の中で臨時の避難所を探そうとし、『有擗扎着回來』何とかがんばって歸りたいという希望を持ち續けた。

しかし林沖は結局のところ諂媚の小人ではなく、忍辱の英雄であり、忍ぶべからざる情況にたち至ってついに反抗の怒火を爆發させ、鬭争の道歩み始めた。」

豊衣足食の俸祿を受け、忍辱妥協の性格をもった林沖が、ついに反抗の道歩むようになるその必然性を、誰もが了解するように事實をもつて極めて具體的に描いているというのである。

宋江がなぜ梁山に上るようになるのか、その必然性は林沖ほど明瞭

ではないが、基本的にはやはり「觀念に現實を從屬させるのではなく、現實をしてその間の事情を語らしむる」精神が貫ぬかれている。これについては秦文兮氏の分析が最も詳密であるが、同じように要旨のみ紹介すると、

「宋江は地主家庭出身の小官吏であり、當時の統治階級に屬する。彼は更にそのような家庭で封建教育を受け、幼少時代から經史に通じたが、これらは彼の忠君思想の基礎となり、後に彼の指導した梁山泊起義の一團に投降の道を歩ませることになった。しかしこうした妥協性の反面、彼は衆兄弟の推戴を受け、梁山泊の領袖として活躍した革命性もある。彼には經史中の『治國安民』『聖君賢臣』に關する理論の影響が見られるが、これらの理論は封建社會では一定の進歩性があり、往々にして一部の知識人に貪官汚吏を痛恨し、窮苦の人民に同情する正義感をもたせた。また彼は統治階級に屬するとはいえ、たかだか小役人に過ぎず、このため下層人民と接觸する機會も多かったのである。これらが彼に積極面をもたらした原因である。かくして宋江には二つの矛盾した性格があり、初めのうちは世間から『不忠不孝』と罵られたくなかったので、『逆天之罪』を犯した晁蓋等の仲間に加わろうとしなかったが、官司につけまわされるはめになり、一方梁山泊の聲勢が浩大になる中で、ついに梁山に上ることになった。」

現實をして語らしめる態度は林冲の場合ほど徹底はしていないが、宋江の出身家庭や社會的地位をも考慮に入れると、彼が梁山に上った必然性もやはり明瞭になってくる。

尤も水滸傳の全ての部分にこの現實主義が貫ぬかれているというのではない。例えば李希凡氏は、注17に掲げた「水滸的現實主義」(下)

水滸傳の後半部について

で、盧俊義が梁山泊に上る一段は「性格發展の必然性、眞實の生活基礎を缺き、現實主義の創作規律に違反する」と批判している。大刀關勝、入雲龍公孫勝なども同様に「概念化」されているという。しかし中にはこういう部分があつても、全體としてみれば水滸傳は現實主義の創作方法に立っていると云える。

こうした水滸傳の現實主義は、招安以後の後半部にも貫ぬかれているというのが私の考えである。後半部には「歴史の眞實」を反映することは「四」で述べた通りであるが、水滸傳の作者はこの歴史の眞實を更に現實主義の方法で扱っている。「歴史の眞實」を作り上げたのは説話の功績であるが、それに現實主義の創作方法を適用したのは作者の功績である。二、三例をあげよう。

(1) 招安を受けるといふ事態を單に水滸英雄の側にだけ立つて見るならば、それを導き出す彼らの忠君思想はどうしても書きこんでおかねばならないが、支配者たちは彼らの忠君思想に乗じて彼らを利用しようとしたという觀點は出てこないはずである。この觀點がキチンと入れられているのは、水滸傳の作者は水滸英雄の側に加擔しつつもある時は支配者たちの側からも事態を見つめ、要するに兩者を併わせた全體を客觀的に冷靜に見ている。

更に作者は忠君思想↓招安のイデオロギーを性急に讀者に押しつけようとはしない。第一回目の招安から第三回目の招安まで、同じく招安でもその内容は事態の變化につれて大きく變わっている。

第一回目(七十四、五回) 朝廷側：

漸く宋江等の害が目立ってきたので、「若不早爲剿捕、日後必成大患」早く何とかしなければ、といふことで、「好言撫諭、招安來降、假此以敵遼兵」と、招安して利用しようと考えた。朝廷の側ではま

だ身近な所で宋江等に痛い目にあつていなかつたから、彼らを輕視し、尊大に構え、詔書の内容も「倘或仍味良心、違戾詔制、天兵一至、齟齬不留」と甚だ恫喝のものだった。

梁山泊側：

天使が派遣されてくることを聞いた吳用は、今度の招安はうまくいかないだろうと豫想した。彼は「等這厮引將大軍來到、教他着些毒手、殺得他人亡馬倒、夢裏也怕、那時方受招安、才有些氣度。」と、力關係で絶對的な優位に立つていなければ、たとえ招安を受けても權力者の横暴を防ぎきれないと考える。これまでそのことに苦しめられてきた人間としては當然の認識である。果たしてこの度の招安は成立せず、宋江は殘念がったが、吳用は「一兩陣殺得他人亡馬倒、片甲不回、夢着也怕、那時却再商量。」と同じ主張をくり返している。

第二回目（七十九、八十回）：

童貫は二敗し、高俅も三敗した後、窮地に迫いつめられた高俅は彼らを招安してペテンにかけ、宋江だけを殺して他のメンバーは解散させようとしたが、梁山泊側は十分備えをなし、そのペテンを見破る。

第三回目（八十二回） 朝廷側：

童貫は二敗して「殺的片甲不歸」、高俅は三敗して「人馬折其大半」、おまけに高俅は宋江等に生捕りにされ、武力で梁山泊を鎮壓することとはとてもできないことが判明するに及んで、朝廷側は彼らを招安する以外に問題を解決する道がなくなった。そこで第一回目の招安の際の「不要失了朝廷綱紀、亂了國家法度」といった類の面子をかなぐり捨てて、「宋江這夥、不侵州府、不掠良民、只待招安、與國

家出力」と、ひたすら梁山泊の意を迎えようとしている。詔文の調子も「切念宋江、盧俊義等、素懷忠義、不施暴虐、歸順之心已久、報效之志凜然。」と、第一回目とは打って變つた低姿勢ぶりだった。

梁山泊側：

今度は力關係で絶對的な優位に在つたから、招安を受けてもその後で本意な取り扱いを受ける恐れは先ずないと彼らは考え、招安に就いていく。

このように實際に招安が實現するまでに幾多の紆餘曲折があつたが、その間の事の成り行きは極めて自然である。作者は忠君—招安のイデオロギーを鼓吹しようとしているのではなく、邵青の場合に見られるような招安の成立し難さを極めてリアルに描いているに過ぎない。なお水滸英雄たちが招安を受けた後、一時的にはあるが彼らを解散させたり皆殺しにしたりしようとする提案がなされるし、また彼らはそれらに反撥して再び反亂しようとしたりするが、張用や邵青が、招安を受けた後に皆殺しにされかかったり、一旦招安を受けながら、その後の待遇に不満で、再び反亂したのとよく似ているではないか。

(2) 征遼の段でも、水滸英雄の側に肩入れはしつつも必ずしも遼國に惡、水滸英雄に善という一面的な見方はしていない。作者は遼國の朝廷を惡しざまに描いていないばかりか、宋朝と違い、彼らはむしろ宋江等に好意的であるように描いている。

「臣（右丞相太師褚堅）聞宋江這夥、原是梁山泊水滸寨草寇、却不肯殺害良民、專一替天行道、只殺濫官汚吏、詐害百姓的人。……只把宋江封爲先鋒使、又不曾實授官職、其餘都是白身人。」（八十四回）
彼らは「鎮國大將軍、總領遼兵大元帥」という特別待遇で宋江らを招

安しようとした程である。

一方、この投降の呼びかけがあった後で呉用は考えこみ、一時的にはあるが、遼國に投降した方が賢明ではないかという氣になった。呉用にしてみれば、折角招安を受けたのに、一時は解散や皆殺しの危険もあり、それは何とか切り抜けたものの、先鋒の虚職を與えられて沙漠に困苦を重ねている。たとえ成功してもどうせろくなことはあるまい。それくらいならいっそのこと遼國に従つてみてはどうか、と思われたのだろう。水滸傳の讀者は、もしこれまでの事態の推移を冷靜に見つめてきておれば、この呉用の迷いも無理からぬものとして受け取れるはずだが、呉用は裏表のはっきりしない人間だと思ふ讀者がいたら、その人こそ何かの觀念にとられて水滸傳を讀んでいることになる。ところで呉用のこの「不心得」は、宋江の「忠義之心」によって押えられるが、この場合の忠義はいろいろな事柄を統べ括るものとしてあるのではなく、そうした事柄と同列に並ぶ、比重の小さいものとしてあるのである。

(3) 征方臘の場合でも同じことが言える。水滸傳の作者は方臘の農民一揆を蔑視しているという人もいるが、必ずしもそうではない。先ず初めに方臘が造反しなければならなかった理由を水滸傳の作者は

「因朱勳在吳中征取花石綱、百姓大怨、人々思亂、方臘乘機造反。」
(百十回)

と書くが、こうして動機を説明してやること自體、方臘に悪意をもっていない證據であるが、これに續けて方臘が八州二十五縣を占領し、「自ら國王となり、獨り一方に覇し」と評價ぬきで簡單に記述している。更に方臘の起義全體を水滸傳の作者はどう見ていたかについては、おそらく秦文今氏の次のような指摘が正しいだろう。

水滸傳の後半部について

「方臘起義の初めは、發展が非常に速く、これはきつと人民の支持と關係がある。彼が江南半壁の皇帝となり、次第に江南地主階級の代表となるに及んで、彼は勢力に目がくらむようになり、一般の統治者と異なる所がなくなり、爭權奪利集團の頭目となり、人民から離れたが、この時に人民も彼を放棄した。」

そういう歴史現象を反映したものだといふのである。いづれにしても方臘を蔑視してはいない。

水滸傳の後半部でも、水滸英雄の側に一方的に加擔しつつ彼らの忠義心や武勇を強調し、その面からのみ現實を解釋することは、作者の取らざるところであつた。前半部に於けると同じくここでも「觀念に現實を從屬させるのではなく、現實をして語らしむる」リアリストである。この現實主義が水滸傳の基本的な創作方法であるが、その間に自ら一つのイデオロギーが流れている。それは端的に言えば「反權力」である。水滸傳の作者は反權力のイデオロギーを生(な)のまま語ることはあまりないが、にもかかわらず多くの事實の積み重ねの中で、それは自然に明らかになっている。リアリズムは、無數にある事實から何を取捨選擇するかによつて作者の思想を表現する方法をとる。水滸傳の作者は冒頭に高俅出世の話柄を設け、巻尾に宋江らが支配者たちの毒手にかかつて殺されていく場面を置いた。前者では高俅のような權力者の横暴が水滸英雄の鬪争を引き起こしたことを言いたのであり、後者も支配者たちはいつまでも陰險、悪らつであることを主張したかたと見える。

五

清の錢彩の著わした「説岳全傳」という章回小説がある。岳飛の一

生を、その抗金活動を中心にして述べたものである。私は、今まで述べてきたことの論旨をより明瞭ならしむるため、最後にこの書を分析して水滸傳と比較対照して見ることにする。

この書で岳飛はまるで金と戦うために生まれてきたように描かれている。背中に「精忠報國」のいれずみがあったことは有名だが、また隨時忠心を披瀝している。

「替國家辦得事業、自己掙得功名。」(四回)

「我岳飛雖不才、生長在宋朝、況曾受承信郎之職、焉肯背國投賊(賊とは楊公を指す)、……岳飛生是宋朝人、死是宋朝鬼。」(二十一回)

「爲臣盡忠、爲子盡孝。生於大宋、即爲宋臣。」(四十六回)

そして後はこの忠義心を土臺にして、初めから終わりまで抗金を追求した。そのため彼は途中で出會う部隊を、できるだけ辭を低くして自らの指揮する抗金の陣營に迎え入れていく。その中には初めから岳飛の味方で、その合流はただの合流でしかない者もいるが、一度は宋朝に敵對し、岳飛の討伐の對象となりながら、岳飛に擊破され、かつ彼の仁徳に感じて歸投した者が多い。洞庭湖の楊虎、鄱陽湖の「水寇」餘化龍、太湖水寇威方、棲梧山の何元慶、山東九龍山の楊再興などである。岳飛は彼らを自らの隊伍に編入しようとする際には、例えば

「將軍若果不棄、與你結爲兄弟、同扶宋室江山。」(三十回、餘化龍に對して)

「將軍若肯同扶宋室江山、願與將軍結爲兄弟。」(四十七回、楊再興に對して)

と慰撫して相手の愛國心を呼び覺そうと努めている。

この書には初めから終わりまで岳飛に敵對し、それ故彼に誅滅される以外になかったもう一種類の隊伍も描かれている。それは洞庭湖の

楊公である。この小説の楊公に對する見方は終始極めて冷淡である。岳飛がまだ湯陰縣にいた頃、楊公の部下王佐が彼を仲間に入れようと勸誘に來たことがあるが、彼は「焉肯背國投賊」と斷り、彼の母は

「做娘的見你不受叛賊之聘、甘守清貧、不貪濁富、是極好的了。但恐我死之後、又有那些不肖之徒、前來勾引、倘我兒一時失志、做出些不忠之事、豈不把半世芳名、喪於一旦。」(二十一回)

と言って彼の背に「精忠報國」といれずみした。これによると楊公の農民軍は不忠の徒ということになり、あからさまに蔑視されている。更に岳飛の楊公との戦闘場面(四十七回〜五十二回)にもその蔑視はくり返し表現される。楊公軍はしばしば姑息な手段で勝利を得ようとしたり、岳飛側に内通する者があつたり、また内通したのではないかと疑つたりというふうには楊公軍は團結のない烏合の衆であるかのような描き方がそれである。

以上まとめると、この小説には三種類の性質を異にする隊伍が現われる。

(1) 岳飛を代表とする、抗金を第一義的に、自らの使命として追求した一隊。

(2) 一時は岳飛と對立しながらも、結局は彼に歸降して抗金戰に従っていく者。餘化龍、楊再興など。

(3) 岳飛と一貫して敵對し續け、結局は彼に滅ぼされる者。楊公の農民軍。

「北盟會編」に記されている忠義軍と、この第一類とが同じ性質であることは論を俟たない。同じように張用や邵青が第二類に該當することとも、また多言を要しないであろう。ただし張用はこの小説に姿を見

せており(三十三回)、曹成の部下として(「會編」によれば曹成は張用の盟友)茶陵關を守っていたが、後に岳飛に歸順して統制の職を與えられている。

私は「三」「四」で、北宋末から南宋の初めにかけて三種類の隊伍(忠義軍、張用や邵青のような隊伍、農民軍)が存在したと論じたが、この小説を借りて先ずこのことを確認しておきたい。この小説に登場する隊伍を三種類に分けたのはこのためでもある。この小説の中には虚構もあるが、ほぼ歴史事實にそって書かれている。

さてこの小説には、話の運びがどうも不自然だと感じられる個所がいくつかある。その作爲が些細なものであれば、水滸傳にも見られるものであり、とりたててあげつらうこともないのだが、そうした部分がかかり多いのは問題である。例えば楊再興の場合(四十六、七回)がそうである。彼は岳飛と三百餘合手あわせしても勝負がつかない程の使い手であるが、結局岳飛に負ける。その前岳飛に「何不歸順朝廷、與國家出力」と呼びかけられても、「你不若同我在山東舉義、先取了宋室、再復中原、共享富貴、何苦輔此昏君。」とやり返して、反抗心旺盛なところを見せているのに、ところが一旦負けたとなると、「元帥、小將已知元帥本領、甘心服輸、情願歸降。」(四十七回)とあっさり歸降しているのである。一騎打ちに負けただけで、それまでの反抗を撤回してしまう位なら、それ以前の「落草」は一體何のためであったのかと疑問がわく。

張用がこの小説に姿を見せていることは前に指摘したが、張用は兄の張立にちよつと説得された位で「既如此、只好明日詐敗、獻關與哥哥罷」と極めてあっさりと投降を決意している。やはり不自然の感があるのは免れない。その他楊虎にしろ、何元慶にしろ第二類に屬する

者はあまり簡単に降伏し過ぎる。勿論中には實際あっさり胃を脱いだ者もいたかもしれないが、何しろそれまで朝廷に弓をひいていたのであるから、同じく投降するにしても、もつと心境は複雑で、苦澁を味わうことも多かったであらうと思われる。

彼らが次々と麾下に投じてくる必然性は、岳飛の側に立てば、彼らの愛國心を引き出し、抗金の隊伍に合流させていくということである。明らかであるが、しかし招降される彼らの側に立てば、その必然性は十分人を納得させるに足るものではない。

こうなるのは作者が一方的に岳飛の側に立っているからである。作者はそこからしか物を見ようとしなない。他の隊伍はどれだけ岳飛に協力的であるかによって評價される。楊公が蔑視されているのは、彼は岳飛の協力者ではないからである。これは言い換えたら「抗金のイデオロギーが前面に押し出されている」ということである。先ず初めに「抗金」のイデオロギーがあつて、これを基準に事實を取捨選擇するやり方である。まとめると、「説岳全傳」は一方的に岳飛の立場にだけ立ち、「抗金」のイデオロギーを前面に掲げ、そのイデオロギーに現實を從屬させていく方法を取っている。これは現實主義とは反對の、いわば觀念主義である。これに對して水滸傳は、水滸英雄の側に肩入れしつつも事態の推移を全面的、客觀的に見つめており、現實を多く記すことによつて全體として「反權力」のイデオロギーを語っている。これは現實主義の創作方法である。

注(1) テキストとしては一九六一年、北京中華書局「水滸全傳」を用いた。

(2) 私は征田虎、王慶の段はもととはなかつたものと考えた。水滸傳によれば、大遼を破つて凱旋するのが宣和四年冬月、方臘征討に出發するのが宣和五年春であり、田虎、王慶の段は時間的に入り込む餘地がない

からである。征遼の段は、こうした時間的な食い違いも発見されないで、もともと存在したものと、しばらくは考えることにしたい。なおこうした見方をする、田虎、王慶の段のない百回本が、もともとの水滸傳に最も近いように思われる。

(3) 拙稿「水滸傳の對異民族意識について」(日本中國學會報「二十一所收」)参照。

(4) 餘嘉錫氏「宋江三十六人考實」から引かせてもらった。

(5) 尤も私の考えでは、從容として死ねたのは宋江等の知識人グループのメンバーだけであり、宋江が藥殺されるのを知って「哥々、反了罷」と叫んだ李逵に代表されるもう一つのグループは、こうした事の成り行きにはおそらく不満だったのであり、招安—征遼—征方臘の路線を必ずしも歓迎していなかった。

(6) テキストは、一九六二年、臺灣文海出版社のもの(光緒四年如果袁氏越東排印本)を用いた。

(7) 水滸傳八十二回に、招安を受けて京師へ向かった宋江等は、二面の紅旗を掲げていたが、一面の『順天』と並んで、もう一面には『護國』の二字が書かれていた、とある。

(8) ここの「會編」の文は「用責其不忠」であり、この文面だけだと、この不忠は朝廷に對する不忠ともとれるし、張用個人に對する不誠實とも取れる。しかし王成は、城上に張用が現われると、城下で彼に向かって聲啞しており、ということはこの時王成は、張用が鄂州城中に居ることを知らないで攻めたと思われる。それにこの時の張用は鄂州の最高責任者ではない。この二つの理由から張用に對する不誠實を責めたとは考えられず、やはり朝廷に對する不忠をなじったと取る。

(9)(10) 餘嘉錫氏「宋江三十六人考實」参照。

(11) 威方は初め兵士だったが、盜賊の仲間入りし、やがてその首領となり、衆を率いて建康の杜充のもとに投じた。建康が金に占領されると、建康統制扈成を殺して配下の兵を奪い、宜興にいた岳飛のもとに一時身を寄せるが、離脱して宣州に往き、城を攻めたが落とせなかった。その

際の城上からの「威統制、爾の部曲皆これ官軍なり。あに國家艱難の際を念むざらんや、何ぞ苦だこの城を攻めて盜賊とならんと欲するや」という呼びかけに、「方敢て朝廷を誣撓せず、ただ士卒皆饑えたるにより糧食を尋覓するを免れず。」と答えている。その後宣州を捨て、湖州に赴いたが、張俊は彼を招降しようとした。岳飛に退路を断たれて進退極まった彼は張俊に投降した。張俊に「國家多難、當に忠義を以て國家に報ゆべし、朝廷に負くべからず。」と諭されて、「敢てせず」と畏まっている(會編「卷一三七—一四〇」)。

(12) 金の南侵後の北中國で、その支配に甘んぜず、山河の險所にたてこもってゲリラ戦を展開した義勇軍。

(13) 「宋江考」(水滸研究論文集「一九五七・北京所收」)。

(14) 「宋江は二人いたか」(東方學「第三四輯」)。

(15) 方應征討に從ったメンバーは、「宋會要」第一七六冊に列擧されている。楊可世、王真、楊惟忠などの名が見える。

(16) 農民一揆が朝廷を否定しないことについては、例えば丁力氏に論述がある「關於宋江受招安的問題」(中國古典小説評論集「一九五七・北京所收」)。日本の江戸時代の農民一揆も、領主の傍なる佞臣を専ら責め、領主そのものは否定しないことが多いのは、多くの研究書の指摘するところである(例えば杉浦明平氏「維新前夜の文學」(岩波新書)六一—七頁)。

(17) 「談々々水滸全傳」的思想、情節和人物」(水滸全傳「一九六二・北京に收める。また「論中國古典小説的藝術形象」一九六一・上海にも收める)。なおほぼ同題旨の分析を、李希凡氏は「水滸的現實主義」(上)(下)(文史哲「山東大學學報之一一九五七年七月、九月號所收」)でも行なっている。

(18)(19) 「論水滸研究中引起爭論的幾個問題」(文史哲「一九五七・一二月號所收」)。

(20) テキストは、一九五五年上海古典文學出版社「說岳全傳」(據同治九年上海務本堂刊本排印)を用いた。